

≡ 文化財だより

第 21 号

平成20年 3月

発行 真鶴町教育委員会

特集

真鶴の史跡を考える

真鶴町重要文化財

14次指定事業について



てきました。

その集積は〈第〇次指定目録〉として累次編纂され、情報センター図書館で閲覧できます。

文化財指定の仕組み

真鶴町で定める文化財とは、あらまし次に掲げるものをいいます。

- (1) 有形文化財（建築物、書画・工芸品、古文書、考古・民俗資料など）
 - (2) 無形文化財（演芸、音楽、工芸技術など）
 - (3) 価値のある史跡、名勝、天然記念物
- では実際に、これまで〈町重要文化財〉に指定された件数はどれほどかといいますと、

古文書の部	62件
古碑・記念碑の部	15
地図・絵図の部	3
彫刻・美術の部	12
民俗資料の部	13
考古資料の部	7

合わせて一二件になります。

これらの物件は、町の付属機関である「文化財審議委員会」が、教

目次

特集 真鶴の史跡を考える

真鶴町重要文化財14次指定事業について……………1

文化財審議委員会

委員長 湯本 満

半島先端に埋もれた貴重な文化財……………2
真鶴御台場

文化財審議委員

小野間 松男

瀧門寺の本堂……………4

文化財審議委員

川口 仁 齊

「鳴の窟」いまわかし……………5

文化財審議委員

櫻井 武

貴船神社の祖霊社……………6

文化財審議委員

平井 義 行

平成十九年度視察研修報告……………7

文化財審議委員

櫻井 武

平成十九年度文化財保護事業……………8

育委員会の諮問に依じて、そのつど答申する仕組みになっており、明年度は一四次指定の時期になりますが、企画に先立ち、従来の視点をやや広げ、〈史跡・名勝・天然記念物〉の分野にも目を向けよう、ということになっています。

「史跡」は文化財

真鶴はわずか七平方キロの狭い

境域ながら、歴史のある町として外部の人にも語る機会があらうかと思えます。そして、この地域にある史跡はと尋ねられれば、大方はまず鴟の窟や源頼朝船出の浜を挙げるかと思えます。

それは正解です。わが国ではじめての武家政治(鎌倉幕府)を開いた源頼朝にまつわる劇的な事実が、この地に秘められているからです。

くわしくは『真鶴町史』ほかの刊行書でご覧いただくとして、意外なことに、地域を代表する史跡とも称すべき「鴟の窟」も「源頼朝船出の浜」も、じつは町の史的文化財としてこれまで指定されていなかったのです。が、これには次のような事情があります。

「鴟の窟」はどちらか

昭和四十五年、真鶴町文化財保護条例の施行にともない設置された文化財審議委員会で、町史跡の第一候補として鴟の窟が話題にのぼったのですが、その時点で既に、湯河原町鍛冶屋山中にある洞窟が「しとどのいわや」として県史跡に指定されているということで、真鶴町指定史跡にする話は立ち消えになったと聞きます。

このように真鶴の鴟の窟は、隣町に座を譲ったかたちで今日まで来たという経緯がありますが、調べますと湯河原にあるのは、登録名を「土肥梶山岩窟(どいすぎやまがんくつ)」といいますから、これとは別に「真鶴の鴟の窟」を町史跡に指定して何らさしつかえないわけです。でも私どもには湯河原に對抗して県指定を得ようという考えはありません。なぜなら県指定になると、規定上重複して町指定とすることができなくなるからです。

史跡を見る目

岩海岸は、頼朝公主従が平家方の追手を逃れ、安房国へ向け出帆した「船出の浜」として古書に明らかなですが、これも鴟窟同様未指定になっています。近年「頼朝祭り」が行われるようになり、仮装マラソンといった観光イベントもありますが、史跡の顕彰としてなされているとまでは言いたいように思えます。

ところで、頼朝公が岩の浜から房州へ向けて船出したのなら、先方の上陸地はどこで、現在そこはどのようなになっているかということも、把握しておく必要があるの

ではないでしょうか。

史跡は、歴史の流れの中で、時間的空間的つながりをもつて存在するものですから、単に地元地域だけを視野において「鴟の窟」とか「船出の浜」を考えるのでは、史跡の十分な理解にはならないわけです。

今後へ向けて

私は先年、頼朝公一行の上陸地点である千葉県鋸南町を視察し、同所竜島海岸で「源頼朝上陸地の碑」と、その傍らの「治承四年八月、源頼朝公が相模国岩海岸より船出してこの地に着く」といった、行き届いた内容の説明板を見ました。そのとき私は、晴れた日ならば三浦半島先端をかすめて洋上七〇kmのあなたに見通せる両町が、将来姉妹都市となり、タイアップして史跡顕彰行事が持てたら素晴らしいだろうなあ、と思ったことでした。

そのほかの史跡候補として、幕末期にかかわる、岬先端の「砲台跡」「番場浦」や、江戸時代相模湾の鰯網漁労基地であった「尻掛浦」、現在「城址公園」になっている「荒井城址」なども検討中です。

なお「史跡」のほか、「名勝・天然記念物」については、いわゆる観

光的評価とはちがった学術・文化的なとらえ方、それには地域内外の識者の意見もとりに入れた上での判断が望まれるでしょう。

半島先端に埋もれた 貴重な文化財 真鶴御台場



真鶴町文化財審議委員
小野間 松男

笠島(三ツ石)を眼下に眺める、真鶴岬の先端に立ちました。

「この場所は、江戸時代の末、外国船の来航に対抗するために造られた真鶴御台場、砲台の跡です。」

「真鶴御台場は、小田原藩五台場の一つで、他に大磯照ヶ崎、小田原海岸、荒久・代官町・万町の四か所に台場がありました。」

ここまで説明しますと、「ええつ、

本当？」と疑問や反論が出ます。それも、そのはず。『幕末の台場の遺跡』碑の近くの直径二・八メートルの半円に並んだ礎石を指差し、「こんな小さな台場？」「弾丸が三ツ石までも届かないよ？」……と不思議そうな顔、顔、顔。

「この礎石は、砲台の石にも使われたかも知れませんが、昭和三十年代初期からの岬先端の観光開発の時に、砲台の石は取り除かれ現在の様な状態になり、観光会社が生活廃材を焼却するため造られた、リフトの荷物置き場、乗せ場なのです。」と説明すると、納得してくれませんが不満気です。ですから、此の礎石を取り除くか、碑を広場中央に移動させるかしないと、観光客、特に小・中学生の疑問を払拭することが出来ません。

小田原海岸の三台場は、縦七・二メートル、横一〇・八メートルの半円形で、嘉永三年（一八五〇）増築されたことが知られています。真鶴御台場の建造は正確には分かりません。しかし、弘化三年（一八四六）九月付けの「海岸御見分心覚帳」（平塚伊沢家文書）に、「真鶴御台場」の図が添えられ、形・大きさが記され、五百目筒と三

百五十目筒の二挺が配備されています。また、県史資料五No一五「大久保氏高帳、領内諸書留」表紙「地方懐中控」嘉永三年（一八五〇）小田原・原家文書に（前略）岬野御台場にて見渡す方角並び海上里数凡 左に記す

小田原御城 子ノ方（北）
高麗寺小 寅ノ方（東北東）
大山 丑ノ方（北北東）

（略）

海陸里数

江戸迄 陸 式拾三里八丁（91km）
海上三拾六里（141km）

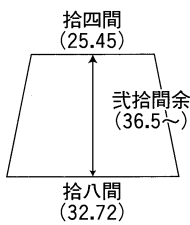
浦賀迄 陸 式拾里（79km）
海上式拾三里（90km）

三崎迄 海上拾八里（71km）

（略）

台場

波打際より
高さ拾丈余（30m）



と記載されており。小田原の三台場と比較すると小規模なものと半円と台形の違いも知ることが出来ます。これは、地形的なこ

とが関係していると考えられます。また、岬先端の崖縁、海からの高さ三十メートルの高台に位置していたことも分かります。

また、この台場には、嘉永六年の「浦固一件帳（平塚・伊沢家文書）」に依ると、大筒一貫目筒二門と三百六十目筒一門、矢筒一貫五百目筒と百目筒の五門が配備されていたと書かれています。

この様な幕末の歴史を語る文化遺産や大切な岬の自然植生は、昭和三十一年初めから始まった観光開発活動から浸蝕され始めました。昭和四十七年に「真鶴の自然文化を守ろう」の大きなうねりとなりましたが、時既に遅く開発の流れに敵わず押し流されてしまいました。

昭和三十六年十月のケーブパレス営業開始に向けての広場整地は、真鶴御台場の破壊的な行為は用石の無目的な移動や廃棄となつてしましました。しかし、整地と言う視点から考えられることは、礎石（根石）まで全てを掘り起こし移動したのか、上部の石組みのみなのか不明ですので、一度礎石の有無を確かめる必要があると思われます。一部でも発見出来れば、復元の足

がかりとなり、素晴らしい文化財遺跡、観光資源となると思います。

次に、真鶴御台場の用石を何処から採石したか。古文書等の資料も発見されず、口伝も定かではありません。

岬野に近い石丁場の歴史を辿ってみますと、慶長後半から寛永にかけては、「しとど笠島丁場 但し真名鶴の内 石多シ湊吉シ 御代官八木二郎右衛門 先年 鍋島信濃守勝茂 巳ノ年 伊井掃部直孝殿丁場 しとど笠島より円山迄五丁」と細川家文書「伊豆石場乃覚」（地下鉄7号線溜池遺跡報告書3）に書かれています。

また、寛文十二年（一六七二）真鶴村書上帳の中の「石切出シ申し丁場、ことうはみ丁場に続いて一、村より南ついし丁場

道法村より式拾五丁

一、村より南元地丁場

道法村より式拾九丁

とあります。元地丁場とは距離的に考え、笠島・番場浦辺りではないかと考えられます。更に、岬野近くの採石の痕跡を尋ね辿りますと、山の神裏、観鳥小屋付近の木端石

積み、明治頃は切り出されていたと伝えられる内袋の石切り場、番浦海岸の矢穴の跡、対石浜の崖面などが見られます。御台場への運搬技術、牛車での修羅引き、人力。差し迫った海防と建造期間を考えたいと思います。

最後に、海に突き出した真鶴台場や番浦の意義と役割を土肥筋浦固めの変遷、整備態勢の実態から考える必要があります。

瀧門寺の本堂



真鶴町文化財審議委員
川回仁齊

瀧門寺は、伝承によれば古くは密宗派で弘法大師の草創とされて

います。

鎌倉五山の僧であった義周周信が『空華集』の中に、応安七年（一三七四）熱海温泉へ湯治に行く途中瀧門寺に立ち寄り「遊瀧門寺観瀑布題観音堂壁」という一文を誌していますから当時は小さな堂宇があり、それが寺の始まりだったのだらうと思えます。

現在の本堂は桁行八間半、梁間八・一三間の角柱、寄棟造りで茅葺です。

これがいつ建てられたか、はつきりした記述文書はありませんが、弘化二年（一八四五）に当山五世罷屋和尚の二百回御忌が営まれた際の供養控帳が残っており、その表紙に「新田開発 大鐘建立 本堂建立人」1と記されてあります。

罷屋和尚は、正保三年（一六四六）に没するまで十二年間瀧門寺に住職したことが分かっているので、前述の「供養控帳」の記年から逆算して、寛永十二年（一六三五）から正保三年までの間に本堂の建立が落成したものであらうと考えられます。

一方平成五年に神奈川県が実施した近世社寺建築調査時の専門家は、建築様式から、一八世紀の中ごろ建てられたものであらうとしてい

ますが、この推定は寺録と百年ほどの食い違いがあります。

平成十七年に本堂の補修を前提とした調査が行われた際、小屋組みの中心箇所、和釘で打ちつけられた棟札が五枚確認されています。その中で最も古いのは、寛政四年（一七九二）二月、十四世蘭溪和尚のときに屋根の最上部に簷棟を上げたときのものです。本堂の創建年の確定については、これらの資料を参考として今後の精査と考察が必要です。

*

本堂の造りは客殿形で向拝がありません。湯河原町の曹洞宗英潮院様に、旧本堂の景観が版画として残されていますが、造りは瀧門寺とよく似ており、この形式の構えは伊豆地方に多く見られるもので、伊豆一帯に流儀を同じくする職人集団があつたのかも知れません。

瀧門寺の本堂は、装飾や不要と思われるものを徹底して切り捨て、実用本位に建築され、江戸中期以降は使い勝手と実用とを重視する建物が多くなりました。小屋組みの内部を見ると、太い材料は多く使用されており、意外なほど細い木材が多用されて組み立てられています。資材

が潤沢に調達できなくてもそれを技術でカバーしたようです。当寺の場合も資材にはほとんど地元材が用いられ、着工から完成まで十五年ぐらいかかっているのではないかと、専門家は語っていました。

最近になって発見された明治後期から大正期にかけて作成されたと思えるエッチングの原版から転写した絵図を掲載しておきます。

*

明治初期まで瀧門寺には、岩村内に如来寺、実相院、長昌院の三ヶ寺の末寺がありました。当時の慣例で檀家の葬式は本寺である瀧門寺の住職が主宰し、後の年忌法要は末寺の留守を預かる僧侶が導師を勤めました。

当初、瀧門寺の檀家数は村内でも代表格の十数軒ほどだったようです。それでいてなぜこのように大きな本堂が建てられたのでしょうか。

瀧門寺に残る寺録ほかの古文書には《本寺役寮中》という宛名もののがいくつもあります。瀧門寺の重要案件は、役寮と言われる数人の僧侶の合議によって決定され、末寺やそこにつながる一般の人々を統括していたのでしょうか。したがって本

寺としての対面や機能の上からも大きな本堂が必要だったのでしょう。明治に入って廃仏毀釈の政策がとられると、三ヶ所の末寺は瀧門寺に併合され、末寺の檀家はすべて瀧門寺の檀家となりました。

*

茅葺の家屋は、夏は涼しく冬暖かくて生活しやすいといわれますが、二十、三十年に一度は屋根替えという修復が必要です。しかしながら、土地開発や住環境の近代化が進んで、原材料の調達は容易ではなくなり、さらに伝統技能を持つ職人の高齢化、後継者不足により保守保全が困難な状況になってきています。また、過去

三回の大地震に見舞われ、骨組み構造も歪みや傷みが激しくなっています。

特に大正十二年の関東大震災のときには、本体が南東方向にねじれるように傾き、その損傷はおおきなものでしたが、外側の柱に添柱をして歪みをなおす程度にとどめら

れて現在に至っています。

瀧門寺本堂を真鶴町の構造物文化財として保存しようという話が出ておりますが、そのためには本堂躯体の修復と屋根の葺き替えという懸案を、まず解決しなければならぬと思っています。

※向拝：寺院の正面で屋根の張り出した場所。参拝者が礼拝するところ。



エッチングから転写した絵図

「鵜の窟」いまむかし



真鶴町文化財審議委員
櫻井 武

昭和のはじめに子ども時代を過ごされた方とお話をする機会があり、いまはコンクリートの岸壁に囲まれた真鶴の港がまだその頃には砂浜で、夏ならば学校から帰ったあと日がな一日浜で泳いで遊んだものだとうかがいました。

「ところがあの鵜の窟。あそこは昔小さな岬のようになっていて、そこで砂浜が途切れたんだ。その先にはどうしても行けなかった。」いまでは想像もつきませんが、真鶴港魚市場（魚座）付近にある鵜の窟は、かつて深い洞窟になって

いたということです。海はその洞窟の中まで入り込み、山からは切り立った断崖がせまり、歩いてはどうしてもその先へは進めなかったそうです。目の前には手に取るように真鶴半島が見えました。

「この先へ進みたくても、どうしても進めない！」遠い子ども時代を思い出し、いかにも残念そうに語るのを聞いて、私ははじめて地元の人にとつての鵜の窟の重要性がわかったような気がしました。

○

鵜の窟というのは、鎌倉幕府を開いた源頼朝が平氏の支配に対して挑んだ最初の戦い「石橋山の合戦」に敗れ一時身をひそめた場所と伝えられるところです。ここで追手をつ逃れた頼朝は無事海を渡って房総半島へ上陸、関東の武将や豪族を糾合して鎌倉へ至り源氏再興を期すことができました。幕府の正式な日誌とされる『吾妻鏡』にはこの場所の具体的な記述はみえませんが、『平家物語』の異本から後に独立した『源平盛衰記』に出ています。ただしやはり場所は特定されていません。

しかし、戦国時代の連歌師谷宗

牧の『東国紀行』や小田原北条氏の歴史書である『北条記』には、いまでいう観光スポットのように知られていた様子が語られています。

江戸時代に入ると正保二年（一六四五）、当時の真鶴村名主五味伊右衛門が荒れた洞窟内を整理して石の観音像を安置、禅僧風外や蔭山がそれぞれ窟にまつわる縁起をしたためています。

武家の政権のはじまりとなった鎌倉幕府を開いた頼朝に、起死回生の転機をもたらせたこの場所が、武家政治のルーツにかかわる史跡として重要な意味をもつのは当然です。江戸時代の地誌『新編相模風土記稿』にも詳しく触れられているように、真鶴といえば鴟の窟のある場所として古くから知られていました。

さて、あらためて鴟の窟の地理的位置を考えて見ましょう。海辺、特に入り組んだ磯の海岸沿いに生まれた方ならば身にしみてわかることではないかと思うのですが、浦々（海沿いの里をそう呼びます）は多くの場合洞窟や断崖によって外界とさえぎられています。背後からは山が迫り、細い山道をのぞけば、

人々は船を使わなければ他の場所と行き来ができませんでした。

洞窟や突き出た断崖は、古来浦々を外から守ると同時に行く手をふさぐ境界となる場所でした。鴟の窟は真鶴の集落の人々にとって真鶴半島方面への最初の境界だったのです。そして、次の境界となるのが貴船神社です。神霊を船に載せて集落へ迎え入れる貴船祭りは、いにしえの祖霊（背後に古墳時代の古墳が作られている）や海の幸、山の幸をもたらす神様を、貴船神社を介して人里に迎えるという意味があったのではないかと考えることができます。

まなづる図書館に江戸時代後期に幕府によって作られた『根府川通見取絵図』（文化四年（一八〇七）成立）という古地図の復刻本があります。現在の旧国道一三五号線沿いにあった、小田原から三島に至る根府川通り（通称熱海街道）という道筋を詳しく測量し、当時の景観とともに絵図にあらわした美しい本です。この中に当時の真鶴港の俯瞰図も描かれています。

ところで、現在見られる鴟の窟

にはかつての深い洞窟というイメージはまったくありません。これは第二次世界大戦末、本土決戦にそなえてこの地に特攻隊の基地を建設していた軍によって、周囲の岩が採掘されてしまったことによると伝えられます。これに関して貴船神社の元宮司平井大海氏による貴重な証言があります。

「終戦の年に軍部が神社の崖下を魚雷艇の基地にするため、洞窟を掘り始めたとき、抗議したことがある（中略 戦後、当時）平塚の憲兵大尉をしていたという人会食した（時）、『今だからお話しするが、終戦がもう少し遅れていれば、あなたを引つ張る予定でした』と聞かされて、驚いたことがあった。」（『郷土を知る会』会誌復刻版第一集より）

鴟の窟をはじめ真鶴港内の岩場には有無を言わず軍用に取り立てられたのです。

また、昭和二十四年に襲来し、港に致命的な被害を与えたキティ台風とその復興による港湾整備や、十九年の真鶴半島御林地域の県立公園指定に伴う沿岸道路の開通工事により、鴟の窟の昔日の景観は跡形

もなく消えてしまったようです。しかし今からでも遅くはありません。元通りは無理としても、ある程度は復元して日本の歴史に名を残す郷土の史跡として、後代に引き継ぐ責任を私たちは負っているのではないかと考えさせられます。



真鶴町の氏神様である貴船神社は、人皇五十九代宇多天皇の寛平元年（八八九年）の六月十五日に勧請された社であり、創建以来、幾度となく水火の災害に見舞われ社殿等の移転改築があったと伝えられ、詳しい

年代は定かになっておりませんが、現存する記録としては天保五年七月七日失火の為、焼失した後に嘉永元年五月に新築したとされております。

以降、関東大震災を経て現在の真鶴港を一望できる高台へ新しく社殿を遷座した際に先代の宮司が時代の推移と共に敬神觀念が次第に減少しつつある事を鑑み、歴代の神職を始め氏子総代や神社関係役員などの神社思想の昂揚に尽力を尽くした御霊を祀る為に、震災の影響の少なかった旧本殿を昭和三十九年十一月に祖霊社として御祀りする事にしました。

旧本殿は名工と云われた石田半兵衛によつて手掛けられ、神社本建築としては郡内最古の建築文化財ですが風雨等による摩耗を考え、清朝二十四孝を象る脇障子や、龍と女人の姿を組み合わせた欄間を現在の本殿内へと移しました。

石田一族は、むしろ半兵衛の長男の石田馬之助（小沢一仙）の方が有名で調査も盛んで、半兵衛の祖先や生い立ちが不明ですが、名前は世襲された代々宮大工を生業としていた一族と言われております。

一家は三男の平太郎を除き、男は彫刻をしていたとされており、号は、半兵衛は邦秀、次男の富次郎は希道、永秀、五男の徳藏は俊秀、福田姓を名乗ったと云われており、また十代なかばで早世した四男の金次郎も彫刻の仕事をしていたといわれております。

彼等のノミ捌きは大変見事で、貴船神社以外にも下田の白浜神社、伊東の本宮神社の裾屋台、三島神社の向拝、富士の実相寺、身延の清正公堂などが挙げられます。

半兵衛が誰を師事したのか、また石田一族が活躍した江奈（現在の静岡県松崎町）に彫刻的風土があったかどうかは定かではないが、伊豆の山々の林産物を売るだけでは生計が立てられず当時は多くの大工が各地へ出稼ぎに行かなければならなかった気候風土の為、彼らが伊豆はもちろん相模や甲州各地で一家をあげて活躍し、神社仏閣に名作を残す結果になったといえます。

半兵衛が真鶴に来たのは恐らく天保の終わるか弘仁初めと言われており、その彫刻に三年半の歳月を費やしたと言われ、気が向けば

一週間でも半月でも仕事を続け、気が向かねば一ヶ月でも二ヶ月でも酒を飲んでいたと伝えられております。しかし考えてみれば、二十四孝の物語をどのように表現するか寝ても覚めても、その事ばかりに精神を集中していれば傍で見ると安閑とした日々ではなかったであろうと思われます。

大陸より伝来した彫刻や建築の技術や伝統を脈々と繋いで我が国の文化とし、世界に誇る技術に昇華したのは石田半兵衛のような職人であると思われれます。彼らの職人としての誇りを持ち、当人達は無自覚に「ただ腕を競つてやっていただけ」と謙遜を言うかもしれないが、幕末という色々な意味で純粹で非常に難しい危機を孕んだ危い時代に、利那的にならず、あのような真剣さに溢れた仕事を成し遂げ技術や伝統を継承してきた事は脱帽です。

私達の心を打つのは、彼らの作品上の技巧や形状ではなく、その中に籠って醸し出て来る気魄のようなものだと思います。どんなに形状が完備していても作者の気魄が作品の中心になく、その気魄が我々

に伝わらなければ駄目だということとを彼らの作品を見ていると思いき知らされ、それ故に彼らの作品を無類の物に感じさせてくれます。

平成十九年度 視察研修報告



真鶴町文化財審議委員
櫻井 武

相模湾を望む海岸や見晴らしのよい高台に立つと、北に屏風を立てたような丹沢の山並みが望まれます。その中でも一番東側にあるのが大山です。古くから日本人は船を使って盛んに航海をしてきました。その際の羅針盤代わりにな

ったのが山々です。山を目印にした航法を山立て法と呼び、相模湾のどこからでも目に入る大山は最も重要な目印でした。

大山は別名雨降山とも呼ばれ、農民達にとっては水の恵みをさずける神様と尊ばれました。一方、船を使って暮らしを営む人々にとっても、大山は航行の安全を約束する神様としてあつく信仰されました。真鶴でも漁業や回船業を営む人々を中心に、信仰と慰安旅行を兼ねてお参りをする大山講が営まれてきました。真鶴町文化財審議委員会では今年度、海とのつながりと人々の知恵をテーマに大山を訪ねました。

かつて西相模からの大山道は、小田原東部にある中村川に沿って北上し、中井町を経由して伊勢原方面に向かう街道を使いました。私たちもそのあとをたどることにしました。中井町には江戸民具街道という博物館があります。江戸時代にさかのぼる古い民具を集めて展示し、訪れる人たちにも体験させてくれるという楽しい博物館です。館長の秋澤達雄氏は終戦後の一時期真鶴小学校で教鞭をとられていました。今六十代半ばのみなさん

が小学生だった頃のお話です。到着すると、まずからくり人形を見せてくださいました。みなさんもテレビなどでご覧になったことがあるでしょう。お茶をお盆にのせて運ぶ愛らしい人形です。その精巧な技術はいま世界の最先端をリードする日本のロボット技術の源となるものです。続いて手燭（懐中電灯にあたる）を持たせてくださいました。灯りはろうそくです。いまではほとんど使うことはありませんが、花火をするときには欠かせません。その際わずかな風でも消えてしまうのに苦労するでしょう。しかし昔の人は強い風の吹く戸外、しかも台風の時にも消えずに使える手燭を工夫していました。

驚くばかりです。そこにはからくり人形と同様な精巧な技術が注ぎ込まれていました。民具は使つてはじめてその真価がわかります。秋澤さんは様々な道具を私たちの手に取らせながら、ものに込められた昔の人々の知恵をわかりやすく教えてくださいました。大山を船の航行に利用した海の民の知恵と通じるものです。

さてその後、目的地の大山へ向

かいました。阿夫利神社の境内に立つと眼下に相模一円を見下ろすことができます。西に視線をとれば箱根山の裾野の先に真鶴が手に取るように見えるでしょう。大山登山は日頃の自分たちの生活を神の視点で見直す貴重な体験でもあったのです。近くの日向薬師では、境内全体を文化財として指定している伊勢原市の施策を見学しました。



大山からの遠望

平成十九年度文化財保護事業

- ◎文化財広報啓発事業
- 文化財だより第二十一号発行
- 町民センター・民俗資料館展示事業
- 各施設で年間四回の企画展を実施
- ◎文化財審議委員調査研究事業
- 十一月十四日、江戸民具街道及び大山阿夫利神社・日向薬師へ研究視察を実施
- ◎文化財審議委員協力事業
- 教養講座「くすのぎゼミ」に講師として協力

